

オンラインを用いた海外の大学との大学間協働学習の可能性

— ONE IPUに向けた取り組み —

Possibility of inter-university collaborative learning
between overseas universities using online

— Initiatives for ONE IPU —

国際・教養教育センター

大平真紀子

OHIRA, Makiko

Center for International
and Liberal Arts Education

経営学部現代経営学科

片上 摩紀

KATAKAMI, Maki

Department of Contemporary Business
Faculty of Business Administration

国際大学IPU ニュージーランド

力丸 真耶

RIKIMARU, Maya

IPU New Zealand

要旨：多様化する社会に対応し持続的な成長と発展をするためには、大学間が連携して課題解決を図ることが求められるようになってきている。環太平洋大学と国際大学IPUニュージーランドの日本語教育部門は、系列校でありながら物理的距離の遠さなどにより、これまであまり連携ができていなかった。しかし、オンライン環境が進む中、協働学習の可能性が広がった。今後両大学の日本語教育部門における協働学習として、ビジネスマナーやビジネス日本語の授業での協働学習、日本語のスピーチコンテストの合同開催などの可能性が示唆された。

キーワード：大学間連携、協働学習、オンライン、ビジネス日本語、スピーチコンテスト

1. はじめに

文部科学省（2013）によると、社会が急激に変化する中、様々な危機を乗り越え、持続的な成長と発展を築くためには、大学間が相互に連携し、社会の要請に応える共同の教育・質保証システムの構築を行う取り組みを支援する必要があるとしている。

他大学と連携することで一定の効果が得られるということについては、いくつかの先行研究や報告に見られる。

2大学の学生がチームを組んで、あるビジネスアイデアコンテストへ事業アイデアを企画立案するプロジェクトでの学生たちの学びとして、中橋・大森（2020）では、所属の異なるメンバーが集まって協議することで多角的な視点やアプローチの方法を理解したことで、時間が限られた中で考え方や価値観が異なる

人たちと話し合いを進める方法を考えることなどが挙げられている。

また藤森（2020）では、日本の大学と海外の大学における遠隔授業での連携を実施していて、日本語を勉強する台湾の大学生と中国語を勉強する日本人学生が遠隔授業で討論会をするという形で協働学習をしている。その結果、双方にとって新しい気づきや発見があり、自らが新情報をより深めていきたいという動機付けにつながることで、対話重視の共同学習となるなどの効果を認めている。

さらに杉本（2011）では、伝統的留学ではなく、「留学しない留学」であるトランスナショナル教育への効果を述べている。

環太平洋大学は日本とニュージーランドの両方にキャンパスを持ち、これまで相互の学生の留学を通じて交流を図ってきた¹⁾。しかし、交換留学以外での学

生同士の交流はこれまであまりされてこなかった。その一因として、教職員でさえ物理的な距離のある留学や相手校を遠いものと捉えていたことがあるのではないかと考える。しかし、このコロナ禍でオンライン環境が整備され、オンラインでつながる可能性が広がった。物理的な距離を問題にしない新しい協働学習の可能性が広がってきている。

第二言語教育としての日本語教育における協働学習に関して、池田・館岡（2007）では、日本語学習者が「対等」に互いを認め合い、「対話」を通して社会的関係性を構築し、それ以前にはなかった新たな成果を「創造」することであるとしている。

新しい大学間協働学習の可能性を探るために、本稿では、環太平洋大学の日本校（以下、IPU JP）とニュージーランド校（以下、IPU NZ）の日本語教育部門における取り組みを概観し、海外の大学との大学間連携の一つの在り方を見出すことを目的とする。

2. IPU JPとIPU NZの日本語教育の比較

2.1 国籍・学年別在籍者数

IPU JPは4年制大学で、3学部5学科で成り立っている。日本語教育は、外国から日本へ留学して学んでいる学生たちに実施される。外国人留学生に対する日本語教育をしている機関として留学生別科（以下、別科）を併設している。日本語教育を受けている外国人留学生は学部と別科に在籍する。留学生数は学部と別科を合わせて272名、出身はベトナム、中国、タイ、台湾、韓国、インドネシア等である（2021年5月1日現在）。

一方、IPU NZは現代国際学部を学士課程の主な学部としており、4学科で成り立っている。日本語を学習している学生は1年生から3年生までで27名、出身は地元ニュージーランドが最も多く、サモア、ベトナム、フィリピン、台湾等が少数在籍している（2021年4月1日現在）。

IPU JPではアジア圏からの留学生が多く、留学生全体の97%以上になる。一方、IPU NZでは大洋州の学生が多く在籍している。協働学習をすることで、バックグラウンドが異なる学生同士が交流でき、お互いの違いや類似点を発見し、新しい視点や価値観を持つきっかけとなるであろう。また、IPU JPの学生は母国を離れ日本で生活しているため、日本人社会の中での様々な経験をしている。母国で学習するIPU NZの学生にとって、このような体験を直接聞けることは

日本を理解する上で役立つ。

2.2 授業期間

IPU JPの学部の授業期間は表1の通りである。

表1 IPU JPの年間の授業期間

前期	4月～7月末（15週間＋定期試験1週間）
後期	9月中旬～1月末（15週間＋定期試験1週間）

IPU NZの授業期間は表2の通りである。ニュージーランドでは新学年は日本同様4月から開始する。3学期目は公式の日本語の科目は開講されておらず、補講や日本語の検定試験対策のクラスを実施している。

表2 IPU NZの年間の授業期間

1学期	4月～7月末（15週間）
2学期	8月～11月末（15週間）
3学期	1月～3月末（8週間）

※3学期は公式の日本語科目はなく、補講や検定試験対策を実施。

日本とニュージーランドでは共に4月から新学年がスタートする。そこで、両校の授業期間を考慮すると、授業で協働学習するのであれば、前期あるいは1学期である4月から7月末が適切である。

2.3 学習動機

両校の学生の学習動機について述べる。

IPU JPにおいて、2020年度卒の留学生71名のうち51名が企業就職で、そのうち49名が日本国内の企業に、2名が母国就職をしている。そのため、学習動機として、日本企業に就職したいということが考えられる。

一方、IPU NZに在籍する日本語学習者の学習動機は、子供のころ日本語や日本文化に興味を持ったことである。そして、将来日本で生活したいという目標を持ち、日本語だけではなく日本文化に触れることを望んでいる学生も多くいる。なお、国際交流基金の調査（2020）によると、大洋州における日本語学習の動機として、①日本語そのものへの興味、②ポップカルチャーへの興味・関心、③日本の歴史・文学・芸術等への関心、④将来的な日本訪問のためなどの理由が多かった。

2.4 日本語教育の目標

IPU JPでは、豊かな人間性やコミュニケーション能力を備え、深い専門性と指導力・実践力を持った人材の育成を目標としている。そのため、IPU JPの日本語教育では、外国人留学生に対し、日本社会で必要なコミュニケーション能力、専門的知識、実践力を身につけることを目標としている。具体的には、日本語を使って課題解決をする能力、非認知能力の養成、ビジネス日本語能力の養成、日本のビジネスマナーやビジネス事情の理解等ができるよう授業を組み立てている。

IPU NZの目指す学生像として、様々な職場環境において、異文化社会に適応し、グローバルな視点で物事を考察できること、かつ、自分自身で目標設定のできる人材を育成することを重要視している。日本研究学科で学ぶ3年間という時間の中で、日本語の定着を図りながら、いかにこれらのスキルを身につけさせられるかということが大きな目標となる。

IPU NZ日本研究学科では、日本語学習歴がない学生が入学した場合、3年後の卒業時にはJLPT（日本語能力試験）のN3レベル取得を目指している。IPU NZで日本語を学習する学生は、将来的に日本で就職し、生活したいと希望する学生が多い。しかし、ニュージーランド人学習者がIPU NZを卒業してすぐに日本の一般企業に就職するというのは非常に難しく現実的ではない。というのも、非漢字圏の学習者が母国にいながら日本語を学習するという環境において、大学在籍中の3年間では基礎的な日本語能力の向上を図ることに主眼が置かれ、日本で働くために必要なビジネス日本語やビジネスマナーの修得にまで至らない

からである。そのため、彼らは、まずはALTなどのような英語の教師として日本で働くことを希望する。ALTとなるためには必ずしも日本語能力が問われるわけではないが、日本での生活や職場でのコミュニケーションにおいてJLPTのN3以上を取得していると有利になる。また、N2以上を取得している場合はプログラム参加者のコーディネーターとしてより待遇の良いポジションに就けるといいう利点もある。そのため、IPU NZでは、できるだけ高い日本語能力を身につけることを目標としている。

両校を比較すると、学部特性ゆえ目標設定が異なる箇所はあるものの、日本での就職を目指す学生が多いことが見てとれる。このことは、協働学習をする上での目標の一つとなりえる。ではどのような科目で協働学習が可能なのか、次節では、両校の授業科目の詳細を比較する。

2.5 授業科目とその内容

IPU JPの学部では、日本語レベル中級から超級レベルの学生に対し、直接法で授業が行われる。表3は授業例の一部である。日本語能力向上のための授業もあるが、それよりは小論文やレポートを書くための大学生としての基礎的科目、プレゼンテーションで非認知能力を伸ばす科目、将来就職した際に求められるビジネス日本語に関する科目などが多く開講されている。

IPU NZの授業科目とその内容は表4の通りである。IPU NZでは在学中の日本語教育は主に日本語能力の向上に充てられる。授業は入門クラスから中上級クラスまで全て日本人教師による直接法で行われる。学習

表3 IPU JPの日本語関係の授業科目とその内容（例）

授業科目名	学年	内容
1 日本語表現	1年生	小論文やレポート類の作成の基礎を学び、実践する。
2 総合日本語	2年生	プレゼンテーション能力育成および文章構築能力育成のための学習活動を行う。
3 日本ビジネス事情	2年生	日本におけるビジネスケースを通して、日本のビジネス事情について知る。
4 ビジネスマナー	2年生	様々なビジネス・シーンに必要とされる基本的なマナーを身につける。留学生においては日本におけるビジネスマナーを知る。
5 資格検定対策Ⅳ	3年生	ビジネス日本語能力テスト対策

表4 IPU NZの日本語関係の授業科目とその内容（例）

授業科目名	学年	内容
1 Contemporary Japanese Language1・2	1年生	入門レベルの日本語学習
2 Contemporary Japanese Language3・4	2年生	初級前半レベルの日本語学習
3 Contemporary Japanese Language5	3年生	初中級レベルの日本語学習
4 Japanese Level IIIA・B	3年生	中上級クラスの日本語学習

者は教室以外で日本語に触れる機会がほとんどないため、教室内は小さな日本社会として、受講マナーや、提出物の書き方、試験時の筆記用具として鉛筆を使用するなど全て日本スタイルで行っている。理由として、学習者は日本語だけを学ぶために本学に入学するわけではなく、日本文化を学ぶことも目的として入学をしてきている学生が多いからである。これは、学習者が卒業後日本で就職した際に日本社会にすぐに溶けこめるようにするためである。

IPU JPでは日本語能力向上というよりは日本語で何ができるようになるかという点に主眼が置かれた科目設定になっている。一方、IPU NZの授業科目はそのほとんどが日本語能力の向上に充てられる。しかし、IPU NZでも日本での就職を将来の視野に入れている学生がいるため、日本のビジネスに関する科目やビジネスマナーに関する科目での協働学習の可能性が見出せる。

2.6 課外活動

IPU JPで2021度に行われている課外活動は下記の通りである。課外活動には、大学内で実施するものと学外でするものがある。表7中のスピーチコンテストやプレゼンテーションコンテストは大学内で実施しており、その他の活動は地域との交流活動である。IPU JPでは地域からの交流の要望が多く、例年日数にすると25日、月に2回以上は学外へ出かけて交流活

動を行っている。2021年度は交流活動が減ったりオンラインになったりはしているものの、交流活動が継続できるよう図っている。

IPU NZでは表6のような課外活動を行っている。JSANZは学外で実施される活動であるが、こういった活動はあまり多くない。その代わりに、日本語クラブ、文化クラス、学内コンテストのような大学内の活動を準備し、教室外で日本語や日本文化に触れる機会を作っている。また、系列校である東京経営大学とはオンラインでの交流も行っている。

IPU JPでもNZでも課外活動を重視し、多くの活動に取り組んでいることがわかる。確かに授業での学習は大切であるが、学んだことを実践的に活用するには課外活動は有効的であると思われる。その中でも、どちらの学校でもスピーチコンテストを実施していることがわかる。外国語を学習する際のスピーチコンテストの有効性については先行研究にも事例が挙げられている。

深澤・陳・張(2012)では、スピーチコンテストのためのスピーチ指導をした効果として、話のリズム、聴衆の前で話す自信、アクセント・イントネーションに効果を感じる学生が多かったとしている。佐藤(2018)では、スピーチコンテストに対する記録から、語学学習は「個」の努力と継続の意志が必須であるとしつつも、「公的空間」で「共感」しあう機会があると、動機付けにもなるし思い違いを自然修正するよい

表5 IPU JPの課外活動(例)

	活動名	内容
1	学内スピーチコンテスト	IPU JPの日本人学生、留学生によるスピーチコンテスト。
2	外国人による日本語スピーチコンテスト	国内外の外国人による日本語スピーチコンテスト。
3	ビジネスプランコンテスト	学生自身が事業計画を考案・調査・発表するコンテスト。
4	市町村と連携した国際交流イベント	教育委員会と連携し、地域の小中学校と交流会実施。
5	高校生とのオンラインイベント	高校生と定期的にオンライン国際交流イベントを実施。
6	農業体験	市役所と連携し、市内の施設で農業体験を実施。
7	小学生とのオンライン国際交流イベント	小学校とオンラインでお互いに歌、文化等を紹介する。
8	国際ふれあい広場	ブースによる文化紹介やクイズ、パフォーマンス等を行う。

表6 IPU NZの課外活動(例)

	活動名	活動内容
1	JSANZ(Japanese Studies Aotearoa New Zealandの略称)	年に一度New Zealand国内で行われる日本語スピーチコンテスト。
2	日本語クラブ	日本語の学習方法や漢字ゲームなど学生主体の日本語サークル。
3	文化クラス	その時期の日本の行事(お花見団子、恵方巻作り等)を実施。
4	学内コンテスト	IPU NZの学生同士で漢字や語彙の修得率を競うコンテスト。
5	系列校とのオンライン授業	決められたテーマについて日本語・英語を使用し会話練習を行う。

機会ともなると、スピーチコンテストの効果を認めている。

2.7 抱えている問題点

現在IPU JPが抱えている問題点として挙げられるのが、学生同士の交流の幅が広くないということである。留学生の出身国が似通っているため、普段から同じ国の友人といることも多い。留学生が友人関係を作るチャンスが多くなく、同年代の学生と深く交流する機会が少ない。サークル活動などは友人関係を作り、育む場になり得るが、IPU JPでは留学生も気軽に入る交流サークルが多くはない。確かに、地域での交流イベントは多数実施されているものの、このような事情から、人間関係の幅が制限されている状況になっている。そこで、いろいろな考えやバックグラウンドを持った人と学ぶ場やイベントを提供したいと考えている。

一方、現在ニュージーランド全体で抱える問題として挙げられるのが、日本語に限らず語学学習者の減少である。世界的蔓延を見せたウイルスの影響により保護者が子供に対し安定した収入が得られる職業を推奨する傾向にある。特にSTEM (Science Technology Electric Mathematics) と呼ばれる理系の業種を推奨することが多く、高等教育機関における言語学習者の減少が懸念される。日本語の学習者確保と、学習継続の促進を図るには何らかの仕掛けが必要である。

3. まとめ

IPU JPとIPU NZでは共に日本語教育を実施しているが、日本における日本語教育と母国における日本語教育という環境の違いから、学部における日本語教育の最終目標が異なる。IPU NZでは中級レベルの日本語能力を身につけることを目標にしているが、IPU JPでは日本語能力はもちろん、ビジネスで使える日本語能力の取得を目標にしている。ただ、IPU NZでも将来的に日本で生活したり働いたりしたいという希望を持つ学生が多いことから、日本のビジネス事情やビジネスマナーなどの授業で協働学習の可能性が見出せる。両校の授業期間を考慮すると、授業での協働学習は前期あるいは1学期である4月から7月末の学期が適切である。この学期であればどちらの学校にとっても週に1回、定期的にオンラインでつないで授業を実施することができる。さらに両国の時差を考慮すると、この時期ニュージーランドは日本より3

時間早い時刻のため、日本の午前中に授業を設ける必要がある。開講年次としては、IPU JPではすでに2年次にビジネスマナーが開講されている。IPU NZの学習環境を考えると、3年次の開講が望ましいであろう。IPU NZの学生で、日本への訪問や就職を望む日本語レベルの高い学生にとっては授業の選択肢が増えることになる。授業での協働学習はIPU JPにとっても交流の活発化や多様性の理解に役立つ。IPU NZの学生には大洋州出身の学生が多いが、日本の大学へ留学する外国人留学生に大洋州出身の学生は多くない。協働学習することでIPU JP側にも多様な考え方を学ぶ機会が生まれ、様々なものの見方を理解するきっかけとなる。

さらに、IPU JPでもIPU NZでも、課外活動にも力を入れていることがわかる。これは、教室の中の日本語だけではなく、生きた日本語、実用的な日本語の運用能力を伸ばすために必要なことであるからだと考えられる。その課外活動の中に、両校とも日本語スピーチコンテストがある。スピーチコンテストによる語学学習へのよい影響は一定数認められることから、両校で日本語のスピーチコンテストで協働学習していくことも有用であると考えられる。スピーチコンテストを実施するのであれば、指導の時間を考慮すると新学期すぐに開催するのは難しい。IPU JPもNZも新学年が4月から始まることと、長期休暇期間には学生への指導や活動が滞るため、4月にテーマや出場条件について規定し、10月から11月に最終審査を実施するというスケジュールが適切ではないと思われる。

4. おわりに

本稿では、IPU JPとIPU NZの事例を具体的に概観しながら、海外の大学との協働学習の在り方の一例について考察した。海外の大学との協働学習を考える上で大切なことは、学習目的が合致するかどうか、授業内での協働学習か授業外での協働学習かを決定してそれに応じたプログラムを設定することであろう。これまでは、所在地が離れているため連携すること自体考えられていなかったが、2校の取り組みからは遠隔地の大学であっても協働学習の可能性を見出すことができた。今後、系列校として大学の垣根を越えて一つの課題に取り組む「ONE IPU」を実践していくためにも遠隔地との協働学習の在り方を考察することは重要である。

新型コロナウイルスのために海外留学して語学や文

化を学ぶ機会は減ってしまっているが、オンラインという手段によってつながりを持ち、対話していくことは可能である。これまでにない新たな取り組みを行うことで、新しい学習の可能性を模索したい。

(注1) 日本からニュージーランドへは1年、5か月、5週間の留学が、ニュージーランドから日本へは6か月の留学が可能である。

付記

本研究は2021年度IPU・環太平洋大学学内特別研究費の助成を受けた研究である。

参考文献

- 池田玲子・館岡洋子 (2007) 『ピア・ラーニング入門－創造的な学びのデザインのために』 ひつじ書房
- 国際大学IPUニュージーランド (2021) 「2021年在籍者数データ」 国際大学IPUニュージーランド
- 環太平洋大学国際センター (2021) 「環太平洋大学の外国人留学生数推移」 環太平洋大学国際センター
- 環太平洋大学キャリアセンター (2021) 「2021年卒業生進路調査」 環太平洋大学キャリアセンター
- 国際交流基金 (2020) 『海外の日本語教育の現状 2018年度日本語教育期間調査より』
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey2018/all.pdf>
- 佐藤美智代 (2018) 「第二外国語の授業活性化へのアプローチ－スペイン語の場合－」 『人文研紀要』 89, pp.119-147, 中央大学人文科学研究科
- 杉本均 (2011) 「トランスナショナル高等教育－新たな留学概念の登場－」 『比較教育学研究』 43, pp.3-15, 日本比較教育学会
- 中橋真穂・大森いさみ (2020) 「クロス・アポイントメント制度を利用した2大学間共同プロジェクト」 『大阪大学高等教育研究』 9, pp.59-67, 大阪大学全学教育推進機構
- 深澤のぞみ・陳会林・張鵬 (2012) 「日本語教育におけるスピーチ指導の可能性：全中国選抜スピーチコンテスト西北ブロック予選の取り組みを例として」 『応用言語学研究論集』 5, pp.16-41, 金沢大学人間社会環境研究科
- 藤森弘子 (2020) 「国内の大学間連携による遠隔授業の試み－中上級日本語口頭表現クラスの事例から－」 『東京外国語大学 国際日本学研究』 pp.123-136, 東京外国語大学大学院国際日本学研究院

文部科学省 (2013) 『大学間連携共同教育推進事業』
文部科学省高等教育局大学振興課